～和の風～ 町長随想

増澤 善和

反省と感謝

町広報紙に、このような拙文を書き始めたのは、南条町時代の平成十三年一月号の第一回「町長室日誌」からであった。その後、平成十六年の十二月号（南条町閉町記念号）までの四年間に、四十六回書かせて頂いた。そして平成十七年一月より南越前町広報紙となり、四月号より再び書かせて頂くことになった（四年・四十七回）。新町になって、担当職員から「日誌」より「随想（心に浮かんだ着想をテーマにまとめた文章）」の方が良いのではないかとの進言により「町長随想」になった。随想の方が、社会的に定説でなくても、私個人の考えとして自由に書けたので書きやすくなったと思っている。その内容としては、できるだけ旧三町村共通の話題や、合併して一体感を持てる内容にしたいと思った。まず、郷土史的共通性のもので「天皇家と南越前町」と「紫式部の通った道」の二編である。

「天皇家と南越前町」（平成十八年六月号から同年十一月号までの六か月・計六ページ半）の中での継体天皇の部分は、千五百年前の古代のことで正確な文献もなく、点在する伝承的文献を南越前町という平面の中に線で結んだことは、歴史ロマンの自己満足になってしまったようだ。

また、「紫式部の通った道」（平成二十年五月号から八月号までの四か月・計七ページ）では、往路（山中峠越）についてはある程度分かってはいたが、復路（菅谷峠越）については最後まで迷った（どの文献にもこの説がなかった）。もう一つの迷いは、式部を取り巻く男性像である。まず、彼女の夫・宣孝（ノブタカ）との間の夜媒の有無には二説あり、権力者であった道長との関係も二説あったが、彼女が具平（トモヒラ）親王を一生慕ったとする説は殆どなかった。しかし、私は、紫式部家（歌）集や紫式部日記の解説書を読んでいる間に、式部の親王に対する気持ちが私には伝わってきたのである。できないことだが、彼女の本心が聞きたかった。

また、郷土史以外で旧三町村共通の問題は地震災害、即ち「南越前町の活断層」（平成十九年九月号から十二月号までの四か月・計八ページ）である。これは「今庄町誌」の第一章・地質編を読んで驚いたからである。それまで私は、身近な活断層としては「福井地震断層」と「根尾谷断層」しか知らなかった。そしてこの旧今庄町の断層は、旧河野村・旧南条町にも関係が深いことを知り、とりあげることにした。また、敦賀半島にある原子力発電所の一つでも、大きな地震被害が出た場合は、河野地区だけでなく全町的災害を受けることが予想されるからでもあった。この活断層の正確な位置については、郷土地質学者や文献によって多少違うことがあり、最後は私の科学的勘（カン）？に頼ってしまったことをお詫びしたい。

もう一つの全町的災害として、雪害について書きたかったが実現できなくて残念である。平成十七年（合併した年）の十二月上旬に降った大雪で、町内の杉林は大被害を受けた。通年の雪害ならば、町内山間部の樹木が被害を受けるのだが、この時は海岸沿いの大谷の八幡神社のダモの木（幹部周囲五メートル・常緑樹）が根こそぎ倒れて、神社本殿・拝殿の屋根を突き破った。雪の量より、重い雪質による被害である。地球温暖化で雪害が少なくなるとの説もあるが、これからは暖海水の蒸発による水分の多い雪に注意が必要となるだろう。先年Day After Tomorrowの映画を見た。温暖化により海流の流れが大きく変化し、北半球全域が氷河に覆われるという筋書き。そのスピードも明日・明後日という速さ。アメリカや日本はジェット機で南半球へ逃げないと凍死するというパニック映画である。単なるフィクションでなく、温暖化による異常気象は予測不可能との警告であろう。

さて、これらの郷土史的・自然科学的調査には、三つの町立図書館や県立図書館のお世話になった。また、陳情などで上京した時は殆ど全国町村会館（千代田区）で宿泊するが、幸いにもその隣が国立国会図書館であった。入館には多少手続きが厄介なのと建物が大き過ぎるのだが、中で調査目的を言えば係員が親切に資料を探してくれた。

これらの調査をすることで、私自身の勉強になり、ボケ防止にもなったようだ。

悲しい想い出としては、私を支えて頂いた七人の方々の追悼文を涙しながら書いたことである。平成十三年の坂川彦太元町長、平成十五年の上田雅二元町議会議長と丸岡齊元町長、平成十七年の赤星亮一元町長と山本順一元県議会議長、平成十八年の清水金二元村長と西村由夫元町長。ご指導頂いたことにあらためて感謝申し上げ、心からご冥福をお祈り致します。―合掌―

さて、最後になりましたが、長期間にわたり、つたなくて自己中心的な文章にお付き合い頂き誠にありがとうございました。心から厚く御礼申し上げまして筆をおきます。